

*Collection
of
The World-Literature*



魔の山

I

トーマス・マン

關 泰祐 望月市惠譯

世界
文學
全集

16

河出書房

1955

世界文學全集（第一期）16

トーマス・マン

魔の山 I

特抄本文紙：神崎製紙株式會社
同 納 入：中 井 商 店
表紙クロース：日本クロス工業株式會社
同 納 入：小 島 洋 紙 店

昭和三十年十二月五日五版發行

定價 三百八拾五圓

地方定價 三百九拾圓

譯

者

關^{せき}望^{もち}月^{づき}市^{いち}惠^え祐^{すけ}

東京都千代田區神田小川町三ノ八

發行者 河 出 孝 雄

東京都新宿區市ヶ谷臺町一

印刷者 草 刈 親 雄

東京都千代田區神田小川町三ノ八

發行所 株式會社 河 出 書 房

電話東京(29)三七二一—五
振替口座東京一〇八〇二

目次

解 説	一
魔 の 山	
前 書	二
第一章	二
到 着	二
三十四號室	六
レストランで	八
第二章	三
洗禮盤と二つの姿を持つ祖父のこと	三
ティーナッペル家にて 並びにハンス・カストルプの精神状態について	六

第三章 三四

謹嚴な饗宴 三四

朝食 三五

揶揄 臨終の塗油 邪魔をされた上機嫌 四〇

悪魔 (Satan) 四六

頭腦明晰 五二

一言失言 五六

女さ むろん！ 五九

アルビンさん 六二

悪魔 (Satan) 非禮なる進言をなす 六四

第四章 七一

必要な買物 七一

時の感覚についての餘談 七八

フランス語の會話を試みる 八〇

政治的にうさん臭い！ 八三

ヒッペ 八六

分析 九二

疑問と考察……………九六

食事中の談話……………九九

昂じる不安 二人の祖父のことと黄昏の舟遊び……………一〇四

體溫計……………一七

第五章……………三二

永遠のスープと不意の明光……………三二

「ああ、見える！」……………四六

自由……………一五七

水銀の氣まぐれ……………六一

百科辭典……………六八

フマニオーラ……………一七八

探究……………一九

亡者の踊り……………二〇〇

ワルブルギス祭の前夜……………二二四

第六章……………二四〇

變化……………二四〇

さらに一人……………二五六

神の國家とうさんな救済.....	二六八
激怒　そして或るとも堪らないこと.....	二八六
攻撃失敗.....	二九五
精神的修鍊 (operationes spirituales)	三〇五
雪	三二四
兵士として、しかも立派な	三四四
註	三七五

解 説

トーマス・マンはバルト海に近い北ドイツの町リューベックで一八七五年六月六日に生まれた。リューベックは十二世紀の中葉に建設され、十三世紀にバルロッサによって自由市にされた。この町はハンザ同盟の玄關口として早くから海によって世界に門を開いていた町であるが、このコスモポリタニズムとならんで中世の雰圍氣が濃厚に残されていた。マンは『ドイツとドイツ人』（一九四七年）で故郷の町について、「合理的な散文的な近代的商業都市についてこういうことを言うのは奇異な感じを與えるだろうが、この町には近代前の神經病的な素地が感じられ、魂の或る性向がひそんでいて、この性向の産物が多くのいわゆる變人であって、このような變人はこのような町には常につきものである。どこかの塹に住んでいるこれらの危険のない、いくぶん氣がふれている人々は、古くからの建築物とならんで町の風貌の一部をなしている……」と言っている。トーマス・マンの弟であるヴィクトル・マンは、幼いころベツトで眼をさますと、最初に眼にはいったものは、壁にかけられている繪であつて、塔が林立し、切妻屋根の家が無數に立ちならんでいる町が、大きな河に半圓形にかこまれていて、その河には多くの帆船が浮かんでいる繪、リューベックの繪であつたと述べている……（私たちは五人であつ

た）（一九四九年）

このように中世の世界と近代の世界とが混り合っているリューベックの町は、マンの作品の背景になつていて、初期の短篇の『小フリーデマン氏』（一八九七年）、『道化役者』（一八九七年）、『トビーアス・ミन्दルニッケル』（一八九八年）はもちろんのこと、リューベックが主人公ともいえる長篇『ブッデンブローク一家』（一九〇〇年）、そして一九〇三年の中篇『トニオ・クレーゲル』、いろいろの意味でマンの生活と文學の分水嶺である『魔の山』（一九二四年）、そして近作の『ファウスト博士』（一九四七年）のすべてが、リューベックによって代表される市民性の問題を中心にしている作品である。

これはマンが講演『精神的生活様式としてのリューベック』（一九二六年）の最後に「私は一生を通じて一つの物語だけを語りつづけてきた市民的作家であつて、市民性から脱却する過程を語りつづけてきた。それも、市民からブルジョアやマルキストに轉身するのではなくて、アイロニーと自由とへ飛翔し飛揚しようとする藝術家に轉身するのである」という意味のことを言っているのを考えると、マンが「まだ言葉を持たない、従つて批判もない、しかし新鮮で、全體を把握する」幼い感受力と、また『ブッデンブローク一家』で示した青年期の鋭い觀察力と批判力によつて經驗したリューベックの市民性が、近作の『ファウスト博士』においても背景となつてゐることは怪しむに足りない。

マンの言う市民性からの脱却というのは、マンも附言しているように、市民性に對する輕侮とか克服とかを意味するのではない。即ち市民的倫理を輕蔑して、「緑の馬車で放浪するジプシー」の生活を精神的に模倣する藝術家にならうとする意味ではない。

マンは「私を詩人してくれたものは、私のなかの市民性にほかならない」とはつきりと言っている。この考えはマンの講演『市民時代の代表者としてのゲーテ』（一九三二年）にもはつきりと述べられている。「市民的なもののなかですぐれているものを故郷とする人間性、言いかえると、市民性から生まれた世界的なもの——このような市民性と冒險的な飛翔との運命は、とりわけ私たちドイツ人の運命である。そして、市民性から精神的なものへ飛翔するドイツの運命は、フランクフルトのゲーテの生家である市民の家によって象徴されている」といふ意味のことを述べている。

では、マンの言う市民性とはどのようなものであろうか。それについてマンは、『精神的生活様式としてのリューベック』で『魔の山』に關聯させて述べているが、マンはそこで『魔の山』を市民的作品、市民的生活様式の、象徴的に言うリューベック的生活様式の作品であるとし、その理由として、『魔の山』がハンザ同盟の都市であるハンブルクの青年を主人公としているからというのではなく、この若い「人生の厄介息子」、教育的兩極端の間に置かれた若い冒險家が、嚴寒の夜に魂によって把握できた理念が「中間の理念」であるからとしている。そして、この中間の理念こそドイツの理念であって、ドイツ的とは中間性を意味し、中間にあつて仲介するものであり、ドイツ人は大きなスケールの間的人間であつて、ドイツ精神を云々することは中間を云々することであり、中間を云々することは市民性を云々することであると述べている。

この考えは、『魔の山』の第六章でハンス・カストルプが雪の山中で死に直面しながら到達した認識であつて、『魔の山』の到達

點ともいえる考えである。ハンス・カストルプの認識は、死の冒險が生になかに含まれるべきものであること、死の冒險が生倫理から獨立してはならないこと、しかしまた死の冒險が含まない生は生とはいえないものに變ること、人間の位置すべき場所は冒險と理性との中間の場所であること、形式、倫理、健康、時間などによって代表される生の上に役頭してしまふには人間は歡楽な氣持を持つ點から尊とすぎる存在であること、自由、冒險、無形式、快樂、病氣、永遠などによって代表される死の世界に耽溺してしまふには、人間は知性の自由を持つ點から尊とすぎる存在であることなどである。マンが死と呼ぶものは、生を可能にしてゐるさまざまな形式を分解せしめよう力であつて、生の諸形式を、秩序を、個別を、個人を分解させて、形のない秩序のない、個別のない死の世界へ誘惑するエロチズムのことであるが、このエロチズムこそ生に豊けさと深みとを附與する大きな力でもあつて、これがなければ生は散文的な單調な佻しいものに變り、人間が生きるに値いしない生になる。このような死の分解力への親愛感を心に秘めながらも生に奉仕し、形式、理性、倫理の世界に奉仕する決心をすること、『魔の山』の第七章の一節をかりて言うところ、新しい世界のために死ぬことといえる。ここでマンは、「恐らくその歌の上にいくつもの國を建てることも考えられよう——現世的な、あまりにも現世的な國、非常に遅ましくて、進歩ずきで、ほんとうは少しも郷愁などを知らない國、そして、菩提樹の歌をも電氣蓄音器の音楽に墮落させてしまふような國を」とも言っている。

この點にマンが生のために死への親愛感を克服しようとした努力が、精神的な藝術的な世界にとどまろうとした危険がうかがわれる。政治的なものの拒否がそれである。ゲーテと同じように、そして多くのドイツ人の例にもれず、マンも政治に對して背を向けつづけていた。これはドイツの市民的精神の弱點であつて、ドイツ市民はいくつもの革命の試みで失敗してからますます現實の世界に背を向けるようになり、いわゆる内面的世界へ没入して、第二次世界大戰の破局を迎えるに到つた。ドイツ人は現實の世界を對象とする政治、理想と現實のあいだを妥協させて進まなくてはならない政治の世界を俗惡な世界と感じ、それに對して殻を固くごさして、無限に自由な空想の世界、内面的世界に遊ぶことを好んだ。マンはこのドイツ人の非政治性を第一次世界大戰中に書いた論文『非政治家の考察』（一九一八年）で詳しく解剖しているが、その態度はドイツ民族の非政治性を西ヨーロッパの政治性に對して辯護しようとするものであつた。

マンが死への親愛感を、即ちロマン主義を克服して生への奉仕に向かう決心をしたことを第一の克服とすれば、この第一の克服から必然的に第二の克服が生まれずにはいかなかった。この第二の克服は内面性の克服であつて、政治性への決意であつた。この決意はすでに『非政治家の考察』にも消極的な形で表われているところであつて、この論文の激越な口調、いつものマンのアイロニーが影をひそめた過激な論争口調、いわば齒と爪をもつてたたかき激しさは自信のある者の態度ではなく、今日まで自分が立てきた立場が崩れつつあるのを感じている者の絶望的なたたかいであつた。ドイツ人の内面性、つまりドイツ人の抽象性と神秘主義、一言で言うとドイツ人の音樂性は、それが過去においてどの

ように美しい花を開いたにしても克服されなくてはならないものであることを、マンは『魔の山』を書く前からすでに知つていた。『魔の山』は『ブッデンブローク一家』や『トニオ・クレーゲル』に對して『ヴェニス之死』（一九二二年）とともにマンの生への決意をはつきりと示している作品であるが、マンの政治性への決意を初めてはつきりと示したのは『ドイツ共和國について』（一九二三年）であらう。そしてまた、ドイツの破局にとつて宿命の年である一九三三年の前年になされた講演『市民時代の代表者としてのゲーテ』の、ゲーテについての解釋にもマンの決意が示されている。このころからマンのファシズムとのたたかいが始まつてゐる。そのころマンがドイツのファシズムの怒濤を防ぎとめようとしてつづけた努力の結晶として、作品には『マリオと魔術師』（一九三〇年）があるし、講演には『理性に訴える』（一九三〇年）がある。

ヒトラーが政權を手中におさめたころから、マン兄弟にはユダヤ人、それもブラジル系ユダヤ人というレッテルがはられ始め、ドイツにとどまることが日ごとに危険になつた。マンは一九四五年にワシントンでした前記の講演『ドイツとドイツ人』で、ドイツのファシズムを批判して、『良いドイツ』と『悪いドイツ』は二つのものではなくて一つのものであることを述べ、過去において美しいものを世界に贈つた良いドイツのなかに悪いドイツの萌芽がひそんでゐたこと、例えば人間の宗教的自由を回復させ、敬虔主義的な良心檢討によつて人間の心理探求を進歩させ、ドイツの唯心論的哲學を發展させ、道德によるキリスト教的道德の克服を可能にしたルッテルが、一五二五年の農民戰爭に際して王侯たちに向かつて農民たちを狂犬のように撲殺するようにと呼びかけた

ことを指摘している。このいわゆる内面的自由と政治的自由との相反、これがドイツ民族の破局を招来したのであって、内政的な自由に関心な民族が對外的な自由という餌を見せつけられると、そこに必ず偏狭な國家主義が生まれ、他民族の自由を殺そうとするエゴイズムに走り、「ドイツ民族の自由のための運動」を口にする「國家社會主義」の矛盾が可能になるのであった。

一九三三年二月十日にマンはミュンヘン大學で「リヒャルト・ヴァーグネルの苦惱と偉大性」というエッセーを朗讀して大喝采を博した。その翌日マンは身のまわりの小さな荷物を持ってアムステルダム、ブリュッセル、パリを訪問する旅にたつたのであった。そしてスイスで故郷の新聞を開いたマンは、彼が「逃亡」しなかったら處罰されたろうという記事を読み、「ミュンヘン新聞」紙上で、ドイツの精神界の代表者がこぞって彼の「ヴァーグネル誹謗」に對し激烈な抗議をしているのを讀んだ。この有名な知識人たちはすべて最近までマンの家に出入りしていた人々、そしてヴァーグネルについての講演に喝采を惜しまなかった人々であった。ヒトラーのファシズムと勇敢にたたかっていたマンも、精神の世界に生きる人々のこの不信と愚劣と怯懦には致命的なショックを與えられたにちがいない。マンは家と財産を没收され、市民権を剝奪された。マンはチロールに避難した弟のヴィクトルに「史上の大きな革命を世界は今日までとにかく畏敬の念をもつて眺め、それに耳をすましてきた。しかし今度の革命はこれは革命ではなく、陰惨な野蠻狀態への復歸である。私はこの革命には決して屈服しないだろう。この革命と妥協するよりも他國で死ぬことを選ぶだろう。」と書き送った。

こうしてマンの亡命生活が始まった。一九三八年の春、マンは

アメリカ合衆國の十五の都市で「來たるべきデモクラシーの勝利」という講演をし、同じ年にプリンスストンに居を定め、ドイツ在住中から書き始めていた「ヨゼフとその兄弟」を初め、ドイツ「ヴァーイマルのロッテ」「すげええられた首」などの大作をつぎつぎと書いた。そして一九四七年には、「ブッデンブローック一家」「魔の山」とともに、マンの作品の三つの高峯をなす「ファウスト博士」が發表された。

この作品でマンはドイツの作曲家アードリアン・レーヴェルキエーンの運命を物語るが、この小説はマンの自己裁判であるともにもニーチェについての批判の小説でもある。その意味でマンが一九四八年にツェーリッヒでなした講演「私たちの経験の光で見たニーチェの哲學」は示唆に富むものであるが、この小説はマンの作品のなかで最も暗澹としたものであり、救いのないものである。その中心のテーマは三つの交錯したテーマから成りたっているが、そのうち最も重要なテーマは市民社會の没落における藝術の（音樂によつて代表された）運命である。ゲーテのファウストは學者であつて、悪魔と契約を結んで魔法により人生の深奥をさわめようとするが、その肯定的精神によつて救われる。ドイツの民族性を抽象性と神秘的な精神にみるとともに、あらゆる藝術のなかで音樂を最も抽象的で神秘的な藝術とみるマンは、彼のファウストを音樂家にして、しかも没落する資本主義によつてすっかり墮落させられた市民性の藝術家として、徹底的に否定的精神の藝術家として描いている。市民性はもはや内容と形式が渾然とした藝術を生む力を失つて、今日までの藝術の諸形式を模倣するにすぎない形式主義に墮し、すべての形式主義の例にもれず野蠻性に墮してしまふ。藝術のこの原始への復歸は現代の哲學においても

見られる現象であつて、哲學においても生命とか意志とか本能とかいう反理性的なものが支配者になつてゐる。資本主義によつて毒された市民社會の文化はすべて病氣の、死の徴候を帯びてしまつて、藝術も病氣の徴候を帯び、主人公のレーヴェルキューンは藝術のこの惡魔性を、病める娼婦から自らすすんで微毒をうつさせることによつて高めようとする。藝術からあらゆる感情を、溫かさを、心情を驅逐して、人間の心に少しも訴えるものを持たない藝術、愛情をも微毒の形でしか取り入れようとしなない藝術、このような藝術が最後に生もうとする音楽はベーターヴェンの第九シンフォニーの撤回を意味する非人間的な第九シンフォニーである。音楽の、そして藝術のこの野蠻性、非人間性がヒトラーの政治の野蠻性と非人間性を背景にして語られるのである。音楽家レーヴェルキューンの一生を語る友人ツァイトブロームは市民的人文主義者である。『ファウスト博士』は市民的文化の（政治を含めた）挽歌であり、市民性の産物である市民的ヒューマニズムの挽歌である。初期の短篇からマンの作品の基調をなしてきた市民性への訣別の作品が『ファウスト博士』である。なぜならば、市民社會は亡びてしまつたからである。それとともに市民的ヒューマニズムも永遠に亡びたのである。レーヴェルキューンがマンであるとともに、ツァイトブロームもマンであつて、マンは自らの藝術と生涯を磔刑に處したともいえる。そしてその磔刑が完全なものである限り、その磔柱の下から新しい文化が生まれる可能性ものこされてゐるであらう。マンの信仰ではこの新しい文化は社會的ヒューマニズムと呼べるものであらう。

マンは破局の作品、否定の作品である『ファウスト博士』について、グレゴリウス傳説に取材した『選ばれた人』（一九五一

年）を發表した。これは『ファウスト博士』を裏返しにしたともいえる作品で、暗黒におちこんだ人間の世界にも惡魔の光がさしこむ可能性を示唆した作品である。

トーマス・マンの父親はリューベックの商人で船主であつて、市參事會員であつたが、一八九二年、トーマス・マンの十七歳の秋に死んだ。この父親はマン一家の市民時代の頂點を表わす人物であつて、この人物の死によつて市民階級としてのマン一家は崩壊し、藝術家の一族としての時代が始まつたのであつた。『ブツデンブローク一家』のトーマス・ブツデンブロークはすでに單純な活動的な生活力旺盛な市民ではなくて、内省的、精神的で、マンのいわゆるデカダンスに落ちこみかけた人物であるが、この人物のモデルである父親は典型的な市民であつた。しかしリューベックの市民の水準よりも高い教養をもち、洗煉された趣味をもち、考え方もきわめてリベラルな人物であつた。この父親の祖先はニュルンベルクの仕立師であつたが、父親の曾祖父から商人になり、祖父がリューベックに移つて穀物の問屋になり、海に向かうに穀物を送り出した。トーマス・マンの母親ユーリアは娘時代の名前をダ・シルヴァ・ブルーンズといい、このユーリアの祖父が十九歳のときにブラジルに渡り、コーヒーと砂糖の栽培を始め、ポルトガル系ブラジル人の娘マリア・ダ・シルヴァと結婚した。ユーリアはこの夫妻の長女として生まれたが、のちに四人の弟妹とともに教育のためドイツへかえされた。そして一八六九年に十八歳で結婚した。従つてマンの血には北國人の血と南國人の血が流れてゐるわけである。

マンの父親が五十二歳で亡くなると、マン一家はリューベック

からミュンヒェンに移った。マンはミュンヒェンの火災保険會社の無給の見習員になり、机の下でかくれて小説を書いた。この小説は『墮ちた女』という短篇で、「社會」という雑誌にのり、これが詩人リヒャルト・デーメル之眼にとまり、今後の作品をデーメルたちの雑誌「パーン」に寄稿するようにという手紙をもらつた。

これに力を得てマンは保險會社をやめ、『小フリーデマン氏』を書き、これは雑誌「新展望」にのつた。のちにこの短篇の題名で發表された短篇集に收められたものは、すべて人生から忘れられた不具者、孤獨者を主人公にしていて、生活能力を持たないために亡びる人々である。

この短篇集が出版されたころマンは兄のハインリッヒとともにイタリアにいたが、ゲーテがイタリアによつて深い影響をうけたのに反し、マンは「ラテン民族は眼に良心の色を持ち合せていない」と言つて、北國生まれのモラリストのままでドイツに歸つた。このイタリアの旅でマンは『ブッデンブローク一家』を書き始めた。健康で單純な生から洗煉された精神性への變化的過程を、生物學者的綿密さで『ブッデンブローク一家』の中に通つたマンは、次の作品『トニオ・クレーゲル』において、主人公に「生」に對する憧憬を抱かせているが、この生への憧憬は精神の自分自身に對するナルシシ的な愛の反射にはかならない。『ヴェニス」の死』は深淵的な精神の冒險を高貴な消遣な形式に包んだ作品である。

マンは夫人が一九一二年に肺炎でスイスのグヴォスに滞在したとき、それを見舞つて三週間グヴォスにとどまり、少し風邪をひき、サナトリウムの醫者たちから「浸潤箇所」を理由に引き止められようとしたが、『魔の山』の叔父ジェームス・ティーナッペ

ルのように低地へ逃げ歸つた。この三週間の見聞を材料にして病氣、死、分解の魔力による人間性のグロテスク化を喜劇的に短篇として書くのが最初の計畫であつて、『ヴェニス」の死』と同一のテーマを喜劇的に扱はずであつた。

一九一三年に書き始められたこの作品は第一次世界大戰の勃發によつて中断され、一九二四年の秋に發表されたが、そのためもあつて當時の、従つて現代の文明の痛烈な批判の作品になつた。『魔の山』までの作品においては、死に對する親愛感が多少とも陶醉的に書かれてゐるのに反して、『魔の山』においては、生の世界に奉仕する醫者の冷靜な態度が感じられる。これは『魔の山』が大戦前に書き終られたら望めなかつた態度であつたらう。マンもそのことについて、一九一四年の晴天の霹靂は小説『魔の山』の最後になつてゐるが、實際は小説の冒頭にあつて小説のあらゆる夢を呼びさました霹靂、爆發させ、眼ざめさせ、世界を一變させる霹靂であり、マンが育つた市民的——藝術的時代にピリオッドを打ち、今後私たちが今日までの生活や詩作をつづけられないことをはっきり知らせてくれた霹靂であると言つてゐる。

マンは『魔の山』というレトリックに入れる實驗材料としてきわめて單純な一青年を選び、この青年の單純性を前書きの中でも強調してゐる。しかし、この單純な青年のなかに、魔の山の魔力に對する感受性がひそんでいることを第二章で暗示してゐる。五千フィートの高さの魔の山に渦巻く死の魔力はすべてこの單純な青年を中心として渦巻き、青年を「教育」するのである。すべての教養小説の主人公の例にもれずハンス・カストルプも全く受動的な主人公であつて、作者が中心にゐるのは、前書きでも述べられてゐるようにな主人公でなく、主人公のまわりに纏れい離

れあい、配列を變えつづけている觀念のコムプレックスである。そして、これらの巨大なさまざまな觀念はすべて作者が體驗した觀念であつて、この意味でゼテムブリーニも、ナフタも、シヨーシャ夫人もペーベルコルンも作者の分身である。マンはこれらの人物の代表する觀念、そして魔の山の觀念を相手に陣取りをするハンス・カストルプと一緒に陣取りをしているのである。作者はその陣取りの結果を明確な形で示してはいない。作者にとっては陣取りの成果よりも陣取りの過程が主眼であつたといえよう。ハンス・カストルプは第六章の「雪」で陣取りの結末に達しているが、その重要な認識もベルクホーフへ戻ると、「雪の中で夢に見たことはもう忘れかけ、その時に考えたことも、その晩のうちにもうよくわからなくなつてしまつた」

更に第七章になつてからの主人公は破局的段階に達した魔の山の雰圍氣にすっかり感染してしまい、まわりの無感覺とヒステリーに對しても全く無感覺になり、いつごろともなくあやふやなカナリア色の頰鬚を生やし、その鬚は「外觀に對する哲學者めいた無關心の產物と考えざるを得ないような鬚」である。そして到着のころは三週間を大きな時間と感じた彼が第七章では自分の年齢もわからなくなり、時計を持つこと、カレンダーを見ることがやめてしまい、生の本質的な内容である時間の區分は「永遠の現在」に變つてしまふ。單純な實驗材料の彼は鍊金術的魔術のために完全に生から遊離してしまい、自分の力だけでは生へ復歸できなくなる。ハンス・カストルプは七年間のレトリクト生活で「變化して」低地へ、生の世界へ——暗澹たる黄昏の世界へ、こども死の世界と變つた生の世界へ歸るのであるか。答えは否に近い答えにならざるを得ない。『魔の山』は「全世界の死の亂舞の中か

らも——雨まじりの夕空を焦がしている陰慘なヒステリックな焰の中からも、いつか愛が誕生するのであるか」という問いで結ばれている。マンはこの愛の誕生の可能性を市民性のうちに感じてこの結びの言葉を書いたのであるか。マンは『魔の山』のあと神話の世界に移つた。これは偶然とのみいえるだろうか。マンはすでにこのころから市民的ヒューマニズムの終焉を感じていたのであるか。とにかく『魔の山』がマンにとつてあらゆる意味で分水嶺をなすことは確かといえよう。

マンは一九五三年にアメリカを去つて、スイスに住むようになった。

望月市恵

Der Zauberberg

魔

の

山

I

望關

月

市泰

惠祐

譯

